

目をこらして (7)



「きのう、森の公園でね、ももちゃんがあそんでいたらね、ふわふわって綿みたいのがいっぱいとんでたんだよ」
朝、おはようの挨拶もそこそこに、ももちゃんが息せき切って話し出した。

幼稚園の隣にある公園には、大きな木が沢山あり、森の公園と呼ばれている。子どもたちは、幼稚園が終わった後、そこでよく遊んでいる。

私も、ちょうど昨日、帰り道に公園の中を通り、ふわふわ飛んでいる綿のようなものを見ていたので、「そうだよね、とんでたよね、先生も見たよ」と話していた。

すると、二人の話を聞いていた、たくみくんが話に加わってきた。

「ぼくもね、見たんだよ。サッカーやっててね。あ、シャボン玉だ、シャボン玉だ、って言ってたんだよ。それでね、まさきくんが、ジャンプして食べようとして、コーチに叱られたんだよ」

自分が見たこと、感じたこと、やったこと、驚いたことそれを言わずにはいられない気持ちがある。





耳をすまして

一年生になって初めてのプールの日。体の小さいかずほは、たくさんの不安を抱えている。その日、私は仕事で、夜遅くなると伝えると、「えー、お母さんにプールのこと話したかったのに……」と不満そう。それなら、手紙を書いて置いといてよ、と頼んで仕事に出かけた。

その夜。家に帰るとテーブルの上に通の手紙。ああそうだった、そんな約束をしたな、と思いながら封を開く。『きょうはげりをしちゃいました。きょうぶうるにはいりました。いちどはいつただけでちやつたよ。ぶうるはさむかつたよ。ぶうるはふかつたよ。』

翌朝、娘と話した。深かった寒かったプールのことを。大丈夫？ という気持ちを抱きながら娘の話聞いていて、その語調が決して暗くないことに気付いた。

自分が経験したことを話す。うれしいことや困ったこと、それを言わずにいられない気持ちがある。

自分の気持ちを言葉にする、そのことに大切な意味がある。だから、今日もゆつくり耳を傾ける。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）

